

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成 30年6月25日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 京都大学地球環境学堂

職名・学年 博士課程3年

氏 名 VAR ELIF BERNA (ヴァル エリフ ベルナ)

助成の種類	平成30年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	HERITAGE 2018 - 6th International Conference on Heritage and Sustainable Development (遺産2018 - 第6回遺産と持続可能な開発に関する国際会議)		
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他(
発表題目	Changes in Vernacular Houses Varied by User Needs: Case Studies of Karacakaya, Ustundal, Dirlik in Trabzon (利用者のニーズに応じたヴァナキュラー住宅の変容:トラブゾンにおけるカラジュカヤ、ウステュンダル、デルリキの事例研究)		
開催場所	Higher Technical School for Building Engineering (ETSIE), グラナダ大学		
渡航期間	平成30年 6月10日 ~ 平成30年 6月18日		
成果の概要	「成果の概要/ヴァル エリフ ベルナ」のとおり <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(証明書)		
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000円	
	使用した助成金額	300,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空賃(大阪~マドリード)	119,080円
		参加登録料	65,000円
		宿泊費	60,000円
査証手数料		10,000円	
国内と外の現地交通費・日当の一部		52,000円	
	上記 306,080円のうち、300,000円		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 本助成金を申請するのは初めてでした。今回の助成をいただき、有意義な国際会議での発表と情報収集が可能になり、大変助かりました。心より感謝申し上げます。		

「成果の概要 / ヴァル・エリフ・ベルナ」

【成果発表の概要】

- 学術集会名：HERITAGE 2018 - 6th International Conference on Heritage and Sustainable Development（遺産2018 - 第6回遺産と持続可能な開発に関する国際会議）
- 開催期間：2018年6月12日～15日
- 開催場所：スペイン・アンダルシア・グラナダ・グラナダ大学
- 主催者：Green Lines Institute（グリーンラインズ研究所）
- 報告者：京都大学地球環境学堂・人間環境設計論分野博士課程3年生 VAR ELIF BERNA（ヴァル・エリフ・ベルナ）

International Conference on Heritage は 2008 年から現在まで、2 年ごとに定期的に開催されている研究集会である。開催中は世界中の著名な研究者が一堂に会する貴重な場となる。毎回 40～45 か国以上から専門家、大学の教員や研究者、学生などが集い、世界各国の研究成果の発表や、様々な教育講演や交流セッションが行われている。



図 1. HERITAGE 2018 の参加者の一部とのグループ写真。

遺産と持続可能な開発に着目した HERITAGE 2018 は 6 月 12 日～15 日にグラナダ大学で行われた。HERITAGE のプログラムは基調講演、オープニングセッション、各種テクニカルセッションで構成されていた。10 の異なる学際的トピックで（1.遺産とガバナンス、2.遺産と社会、3.遺産と環境、4.遺産と経済、5.遺産と文化、6.未来のための遺産と教育、7.歴史的建造物と構造の保存、8.文化遺産と文化観光、9.特別章：イスラームの遺産、10.特別章：聖なる宗教的遺産）口頭プレゼンテーションとディスカッションが行われた。HERITAGE

2018 では毎日 5 つのセッションが同時に行われた。口頭セッションでは、各発表者に 25 分の発表時間（パワーポイントを用いた 20 分間のプレゼンテーションと 5 分間のディスカッション）が与えられた。

本国際会議の主な目的は、研究内容・将来の見通し・方法論・研究材料の他、理論的かつ実践的なアプローチなどの重要な側面に関して議論が行われることであった。本会議は持続可能な開発を共通の目標とし、有意義で平和的な実り多い議論の展開に貢献することを志向した。発表内容は遺産と環境、社会、経済、文化などの関係、歴史的建造物と構造の保存、文化遺産と文化観光など多岐にわたり、多様性を持った興味深い演題だった。

【研究発表の概要】

HERITAGE 2018 では毎日 5 つのセッションが同時に行われた。口頭セッションでは、各発表者に 25 分の発表時間（パワーポイントを用いた 20 分間のプレゼンテーションと 5 分間のディスカッション）が与えられた。

6 月 15 日のセッションでは（午前 11 時から午後 1 時まで）英語での発表を行った。発表のタイトルは「Changes in Vernacular Houses Varied by User Needs: Case Studies of Karacakaya, Ustundal, and Dirlik in Trabzon / 利用者のニーズに応じたヴァナキュラー住宅の変容：トラブゾンにおけるカラジュカヤ、ウステュンダル、デルリキの事例研究」だ。



図 2. HERITAGE 2018 のオープニングセッションと私の発表。

本発表では、文化遺産をいかに保護すべきかという問題意識に基づき、トルコ北東部のトラブゾンにある木造建築に焦点を当てた物の紹介をした。トラブゾンでは、独自の伝統的な建築文化に根差した居住環境が、現代的な生活を営む上で必要な機能が不足しているがために数々の変化に晒されている。極端なケースでは、土木家屋は放置され、時間の経過とともに腐敗し、有形無形遺産が失われる場合もある。私の発表ではトラブゾンの 3 つの農村（カラジュカヤ、ウステュンダル、デルリキ）において、土地利用者によって、いかに木造建築が様々な変化を遂げてきたかについて究明することを目的としていた。

本発表では、空間的、機能的、物質的な変化に着目しながら住居を調査した。調査によって、社会文化的な背景の違いが存在するにも関わらず、3つの村の土木家屋の変化が類似していることが明らかになった。またその類似性は、それぞれのユーザーニーズが近似していることと関連することが分かった。最も共通した変化は、屋根材やファサードの詰め物、主要廊下、台所、トイレ、風呂場で観察された。本研究はまた、さらなる研究の発展のために、土木家屋のオリジナリティに悪影響を及ぼすことなく、建築文化の保存と良質な生活の間でいかにしてバランスをとることができるのかについて考察するものであった。

私のプレゼンテーションでは、いくつか質問とコメントを受けた。その一つは、調査された村でのユーザーフレンドリーな保全アプローチに関する私の見解であった。また、本研究の改善のための提案や新しいアイデアを得ることが出来た。たとえば、Slobodan Dan Paich氏は、より大きなデータセットを処理するアルゴリズムのスケラビリティを改善するための「建設的考古学」の研究を提案した。彼はまた、若い世代が土木家の建設に取り組むために新しい職人になるための訓練を受けられるようにする枠組みを提案した。

尊敬する研究者から貴重なコメントを得られるこのユニークなチャンスの他に、また、異なる研究者の発表から新しいものを学ぶことができた。また、本国際会議の時様々な専門家と会い、交流することが出来た。結論として、本国際会議に出席するのは非常に素晴らしい経験であった。

【謝辞】

スペインでの国際学会は貴重な経験となりました。助成事業により、研究成果の発表し、様々な研究者の方々とのつながりを持つことができました。このような機会を与えてくださった京都大学教育研究振興財団に、心より感謝申し上げます。